



函館ラ・サール学園同窓会会報

函館ラ・サール学園同窓会
〒041-8765 函館市日吉町1丁目12番1号
PHONE/0138・52・0365
<http://www.h-lasalle.com>

日吉の丘

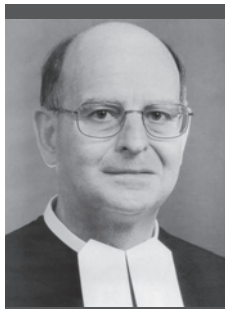
2011.2.10
La colline de
Hiyoshi
Vol.11



祈りと感動

函館ラ・サール学園
創立50周年式典・祝賀会
2010年10月23日





親愛なる函館ラ・サール学園同窓生の皆様へ

ラ・サール会 総長 Br. アルヴァー・O・ドリグス・エチエペリア

ラサリアンの皆さん、ここに御来賓の皆様方をご紹介できますことを光栄に思っております。

今まさに開校五十周年のお祝いがに盛大に行われていますが、更に函館ラ・サール学園で紹介すべき人達がいいます。その方々は教師であり、保護者であり、学園の支援者であり、同窓生の皆様であり、この学園を創るべく共に五十年間歩んできた方々です。この式典に出席させて頂いている大人を代表して、現在函館ラ・サール学園で学んでいる生徒の皆さんに大きく四つのことについてお話したいと思います。



まず一つ目は、「開校までの五十年前、当時、未来をどのように見ていたか」ということについて振り返りながらお話したいと思います。スペイン人の哲学者で、思想家でもあったJose Ortega y Gasset《ホセ・オルテガ・イ・ガセット (1883-1955)》という人がいますが、次の様に述べています。「人生とは、未来との衝突の連続である。人生とは行為が積み重なったものではなく、何を望んでいるかによって決まるのである」と。生徒の皆さんと同窓生の皆さんは、この未来に対する積極的な考え方について学んだことがあると思います。恐らく皆さんご存知のように、函館ラ・サールの存在は、遠く離れたカナダの地で当時三十代だった四人の修道士の心の中で生まれ始めたのです。彼らが函館ラ・サールを設立したいと夢見ていたのは、日本という国を知る前であり、日本人と会う前のことだったのです。これが、修道士が経験した最初の「未来との衝突」だったのです。当時の修道士達は、既に想像の中で、今日ここに集まっている皆さん一人ひとりの顔を思い浮かべていたのかもしれないが、現に皆さんがここにいること自体が、その夢が最も困難な状況でも潰えることがなかった証なのです。一九三二年に開校することは当時困難であり、夢が実現するには二十八年以上待たなければなりませんでした。

開校当時の一九六〇年代は、世界、特に日本は、創造力に満ちた新しい時代、特に政治体制や教育システムを大きく変える環境が整い、その新しい手法が旧来の日本を新しく近代的な日本へと変化させていった時代でした。二つ目にお話ししたいのは、「この五十年間で、世界、日本そして函館ラ・サールで成し得たもの」についてです。若く新しく選ばれたアメリカの大統領 John F. Kennedy《ジョン・エフ・ケネディ》は、就任演説の中で、「国家があなたのために何をしてくれるかではなく、あなたが国家の為に何ができるかを問おうではないか」とスピーチしました。彼は当時の世界で必要な考え方を力説したのですが、皆さんは、この言葉を両親や祖父母から聞いたことがあるかもしれません、教科書の中で読んだことがあるかもしれません。事実一九六〇年代、アメリカの多くの国々は独立を果たしました。ヨーロッパは第二次世界大戦後の疲弊から抜け出しつつありました。ラテンアメリカ諸国は今までにない経済、文化的発展を経験しました。そしてアジアにおいては、多くの国が、世界規模の発展に加わりだしたのです。しかしながら日本を除いた世界は、個人または国の創造できる中で発展を遂げていたのです。それは先

程述べた若き大統領ケネディが国民に対して思い描いたのと同じものだったのです。しかし、日本の場合は異なり、熱狂的にかつ後戻りすることなく発展を遂げ、一九六四年に開催された東京オリンピックが新生日本の熱心さとその意志を世界に知らしめる最初の機会となりました。その時に運行を開始した新幹線は正確な運行と世界でも高度な安全性で時間を大幅に短縮し、多くの国々にとって大量輸送のモデルとなったのです。またマンガやアニメという人気のある文化が、この時期に世界に広がり始めたのです。また一九五〇年代に花開いた日本映画は国際的にも高い評価を受けるようになりました。そして日本人がノーベル文学賞や物理学賞を受賞し、世界中が「日本の奇跡」に驚嘆したのでした。特に科学技術の分野で製品が国際市場で確固たる地位を占め、「Made in Japan (日本製)」の製品であれば高品質で信頼のできるものと世界中の人々が認識するようになったのです。こうした文化的、社会的状況の時代に函館ラ・サール高校の最初の生徒達が入学したのです。その卒業生の中には、皆さんの教師や父親になっている人もいます。函館ラ・サールの教師は、当時も今も、新しい世代を作り出す生徒達に時代を見守るだけでなく、時代を担う人材たれと教えているはずです。OBの人達に尋ねれば、向上心が

あり、厳格な校風の中で教育を受けた様な出来事を思い出してくれるはずですが、それが当時の経済的に急成長を続ける日本に対して函館ラ・サールが応えたものの一つと言えるでしょう。

三点目として、「いま函館のラサールアンが望むべきこと」について述べたいと思います。函館ラ・サールが今までも、そして、これからも成功する鍵となっているのは、教師の思慮であり、勤勉さであり、奉仕する精神にあります。聖ラ・サールはこのあり方を「the spirit of zeal (熱意の精神)」と呼んでいます。この精神を肝に銘じて、教師達は生徒達を、日々未来を熱望する若者として接しています。五十年前、若者達が、当時の精神と応じて熱望していた市民の姿というのは、非常に建設的で、有能で、資質に優れており、未来の日本が新しい国際社会で必要とされる期待に応えることができ人物だったのです。

勿論、一九六〇年代の世界と日本は、今とは同じではありません。皆さんの熱意も以前の世代の若い人達のものとは当然異なります。それは皆さんが二十一世紀の人達だからです。それでは皆さんの熱意はどこにあるべきなのでしょう。皆さんは自分の未来をどのように描くべきなのでしょう。どんな人達と人生を共に過ごすのでしょうか。生徒の皆さん、その質問に答えられるのはあなた自身しかないのです。願わくば、この学校が百周年のお祝いをしている時の自分の姿を想像し、その質問に対する答えを思い出して欲しいと思っています。

大人である私達は、その答えを知る由もありません。しかし、皆さんの日々の表情からその答えを感じ取ることが出来ます。皆さんの未来に対する私の答えは間違っているかもしれません。しかし、今日の世界中の若者の文化を見ていると、十代の人達は誠実であり、献身的でもあり、連帯にも価値を重んじる人達に思えます。つまり皆さんは、皆さんの周りを取り囲む不安定な状況や、複雑で広がりつつある貧困の問題、国際的に増えつつある政治的、宗教的対立にしっかりと対処することが出来る人達であり、そうあつて欲しいと願っています。不安定さは、仮に皆さんが誠実さの重要性を忘れてしまえば、増すばかりになってしまふでしょう。自らに誠実で、そして皆さんを信じ愛してくれる人達に誠実であつて下さい。貧困も、仮に皆さんの人間の尊厳を尊重する献身さが欠けてしまえば、広がり続けることになってしまいます。政治的、宗教的対立も、仮に皆さんが、競争ではなく連帯こそが平和への扉を開くことを確信できないのであれば、対立が増すばかりになってしまふのです。

四つ目に述べたいのは「未来への展望と未来との衝突」についてです。函館に、日本に、そして世界中にいるラサリアンの人達が、聖ラ・サールが育んだ理念について忠実に従おうとしています。その行為自体が、つまりはそれぞれの社会の必要性に込められていることになっているのです。ラサリアンである生徒の皆さんがこの「熱意の精神」を理解して、素晴らしい模範となつてもらえるものと確信しております。

学校というのは、未来との衝突が起こるのが見えやすい所です。ラサリアンの伝統が気づかせてくれるのは、未来を想像するための現在の分析する重要性です。そのことを聖ラ・サールは啓蒙運動の時代に実践していたのです。聖ラ・サールは、大きな都市の貧民街の子供達に教育を行い、啓蒙運動の負の遺産として残されたひどい貧困の中にある家庭の子供達の世話をしたのです。日本で最初に活動を行ったブラザーや教師達は同じことを、当時、経済的發展をしている日本で行い、若者達にそのもたらされつつある豊かさを人々に分け与えるように教えたのでした。今日の函館ラ・サールにいるブラザー、教師、そして協力して頂ける方達が、皆さんを、方向性が見えない国の中でどう教育するかを追求しています。現在、函館ラ・サールでの教育者の使命として若い人達に教えていることは、誠実であれということ、献身的であること、仲間と連帯を共有することであり、その考えが必要なのは、現在世界全体がどんどんと小さくなりつつあり、同時に地球の住人があるまとまった考え方がますます必要になってきている時代であるからです。

以上、大きく四つのことについて話をしてきましたが、最後に結びの言葉を述べさせて頂きたいと思えます。私達皆さんがこの学校の五十周年を祝福し、喜ぶには理由があります。それは大勢の教師や学園を支えて頂いている方々に感謝したいというのがあるからです。特に彼らの「熱意の精神」が、学園時代、既になし得ていたものを超え、若者達が熱望していたものを予見することを、若者達に

可能にしたからです。この五十年に渡る教育で行ってきたものが、改めて誠実な人として献身的になることを誘ってくれます。つまり他人に奉仕できる人々、信者仲間と共に連帯している人々が真のラサリアンスピリットを持っている証となるのです。五十年間に渡り得たそうした素晴らしいもののために働き続けてきたことには価値がありましたし、この成功を世の中に広げていかなければならないと感じています。

最後になりますが、「万歳」という漢字が、一万年以上生きることの意味しているというのを本で読んだことがあります。この日本語をお借りして終わりの言葉とさせて頂きます。心の底から皆さんと言いたいと思えます。「函館ラ・サール、万歳！」



五十周年を迎えて 「本学園の再興を切望する」

函館ラ・サール学園同窓会会長

齊藤 裕志

今は亡き野本義秀副校長が、「この学校は五十周年迄持つだろうか。何だか、それがとても心配だなあ」とポツリと呟いていたと言う。二十数年前のことらしいが、ラベル理事長からお聞きした話だから事実だと思ふ。野本先生がどのような思いで話されたのか、今となつては知る由も無いが、聡明な先生のことだから、当時、既に現在の少子化を読んで、そのことが学生募集に、また、ひいては学校経営に影響を及ぼすであろうことを危惧していたのかも知れない。その予想が的中したと思いたくはないが、本学園の入学人数は年々減少する一方で、平成二十二年度の高校入学人数は、一八八名、その内、中学校よりの、所謂、内進者数が一二〇名であった。しかし市内の他の私立高校は更に惨憺たる状況であり、だから本学園はまだいい方だとの声を聞く。考えられる要因は、長引く不況によるもので、公立高校への志望者が増加したとだとと言うが、一方では入学したい学園の魅力が欠如しているとの声もある。

さてさて、このままでいけば、百周年迄存続が危ういと、私でなくても気掛かりになるところであり、どうして入学志願者がこんなにも減少してしまったのかと思ひ煩っていたら、毎日新聞紙上に、「進学実績を上げた予備校講師に学べ」とする驚愕すべき記事が載った。その内容はと言えば、復権を目指す東京都立高が大手四社の予備

校と契約し、授業内容を診断してもらおうとの事業で、随分と思いきったことをするものだと感心せずにはいられなかった。都立高校が進学実績に躍起に取り組んで実績をあげようとしているのは、私立高校への人気が高い首都圏での復権を目指していることだと言う。一方、本学園の進学実績は、皆様ご承知のように決して誇れるものではなく、あの創立当時のモメンタムは低下しっぱなしで、見る影もない。入学者全般の学力低下、不況による影響で函館まで受験者が来ないと言うが、しかし、である。中学校を創設した時、「六年後の進学実績が待たれる、東大合格二十人」と高言し、期待外れに終わらせたことを忘れないで欲しい。大きな目標を立てておきながら、不況や学生の質を理由に、それを放棄してしまつた様で悲しいし、目標を失つた、或いは持たない教育現場ほど悲惨なものはあるまい。

政治や経済は数の論理で動くものだが、教育とて、ある種例外ではない。私は決して数の論理を盾にして無謀な主張を強いているわけでないが、入学志望者の激減や進学実績が低迷している実態を目の当たりにした時、それ以外の基準を考えられないでいるのが本音である。「日本青少年研究所」の意識調査で、日本人高校生は「暮らしている収入があればのんびりと暮らしていきたい」、米国「一生に何回かはデカイことに挑戦してみたい」、中国「やりたいことにくら困難があつても挑戦してみたい」、韓国「大きい組織の中で自分の力を発揮したい」。各国の高校生が最も高いパーセントを示した調査である。こんな本邦の子供達を預かる教師もつくづく大変だと思うが、最近の子供達がリスクを取らず多くの可能性を失っていることこそ問題だと正

す教師がいてもいい。今は、強い個性と誇りを持って開学当時、本学の教育に尽瘁したプロ集団の恩師達がいたことを思い出し、見習って欲しい。そして、地下に潜んでしまったあの本学独自の競争原理を、今一度蘇らして欲しいものである。

本学園はブラザーと一般教職員との深い信頼関係の中で、ラ・サールスピリットの精神で成長してきたものと思うが、しかし、今後ブラザーの減少が予想される中、教職員の更なる自覚が求められるであろう。賢しかな言動ではないが、今は五十年間の僅かな熟成をエンジョイしているヒマなどないと言言したい。五十周年を契機に、函館ラ・サール学園の再興を教職員に強く切望したいものである。加えて同窓会員には、母校の発展に深く関与し、聖ラ・サールの精神をあまねく実践、継承していく義務がある。そのことを、再認識しようではないか。

(創立五十周年記念誌より転載)



親愛なる函館ラ・サール学園 同窓生の皆様へ

函館ラ・サール学園理事長

Br・アンドレ・ラベル

開校五十周年記念事業に関して皆様方

して頂いたことに対して、理事長としてお礼を申し上げる機会を同窓会報で頂き感謝申し上げます。周年行事全てが成功裡に終わりました。参加して頂いた皆さんにも成功を実感して頂けたと思っております。周年行事の中では何度か来賓の方々の印象を聞いたり読んだりする機会がありまして。来賓としてお越し頂いた方は、ローマ、シンガポール、モントリオール、鹿児島の方々でしたが、ラ・サールファミリーの多くのの方々にも来て頂いたの言うまでもありません。そして、全ての方々がお祝いの様々な場面で非常に楽しんで頂けたようです。

そして、個人的にも心からの感謝の気持ちを述べさせて頂きたいと思ひます。同窓会の会長様、各催しの司会者の方々、同窓会の役員の方々、そして、何千という会員の皆様方に感謝しております。皆様方の多大な協力、奉仕の精神、そしてその中でも学校への愛校心が成功の鍵になつたと考えております。

また、新寮建設のために皆様から頂いた貴重なご支援にも感謝申し上げますと思ひます。学校として非常にありがたいものでした。国際ホテルで開催された祝賀会にも多数参加して頂き感謝申し上げます。祝賀会はとても素晴らしいものとなりました。会場に共に集い、会場に入った瞬間からラ・サールファミリーの雰囲気を感じることができました。私自身とても感銘を受けましたが、その光景は信じられない程でした。心の底から改めて感謝申し上げます。きっと聖ラ・サールも皆が集い、聖ラ・サールが望んでいた「ラ・サールファミリー」が特に卒業生の集まりの中で続いているのを嬉しく思っ

たのではないでしようか。

建物以上に大事なのが、学校は私達すべて、ラ・サールの家族と共にあることです。そして今までもそうであるように、現在の私達はラ・サールの未来と共にあるのです。どうかこれからも一層良い学校を築き、若者や社会に貢献できますように。そして私達ラ・サリアンが理想とする三つの重要な価値観である「FAITH, FRATERNITY, SERVICE」を常に思い浮かべ、日常の生活の中で発展させていくことができますように。

手と心をつなぎ合わせ、前へ進めていくことができますように。その時に神の御加護が私達の努力に祝福を与えて下さいますように。



ラ・サール会と

函館ラ・サール学園

函館ラ・サール高等学校校長／同窓会名誉会長
Br.フェルミン・マルチネス

一六八〇年、フランスのランス市で私たちの活動の原点が誕生しました。聖ラ・サールを中心に集まったカトリックの教職者達が恵まれない子ども達のために初

めての「Ecole」を開校したのです。当時、少人数の若い修道士達と一人の神父は教育における大胆なプロジェクトを立ち上げました。それはまさに神様が希望された意図だと固く信じていました。その教えは世界中に広まり一九七〇年頃に修道士の人数はピークに達しました。しかしその後はラ・サール修道会だけでなくカトリック教会に属する修道会の志願者が減少を続けています。

我が校の開校時には三人のカナダ人、一人の香港人、そして一人の日本人の修道士が赴任して来ました。その一人の日本人修道士こそ、ラ・サール会で最初の日本人修道士となった函館出身の水上留次郎先生でした。一九六〇年の開校から現在まで四十一名の修道士達が本校の修道院で生活を送りながら教鞭をとり続けており、二十五年前からはメキシコ人の修道士も来日し、本校に赴任しております。

卒業生の皆さんは、本校で修道士に出会い、語り合い、友人として接する機会がありました。

皆さんはブラザー達と同じ屋根の下で青春の多感な時期を過ごしたのです。その時きつと「何故、この人たちは修道士になったのだろうか」、あるいはまた「何故、自分の国や文化を捨ててまで、この学校にいるのか」と多くの方が疑問に思い、考えたことでしょう。

殆どの皆さんは本校の修道院に入られたことがあるでしょう。そしてブラザーと共に聖堂で祈りを捧げたことでしょう。また、ブラザー達と食事を共にし、直接ブラザーの生活をかいまみ、授業を受けることで国境無き兄弟達を知ったことと、思います。そうした経験の中から、「実

は、高校時代に修道士になりたいと真剣に考えていた」という卒業生の言葉を聞いたことがありますし、「在学時と同様、今もブラザーを非常に尊敬しています」との賛辞もいただくことがあります。そうした思いを胸に、多くの卒業生が素晴らしい貢献者として社会で活躍されているのです。これから巣立っていく後輩達もまた、先輩達を尊敬し同じように社会に貢献して行くに違いありません。

これまで、私たち修道士が「ラ・サール会修道士としての生活は如何ですか」と直接皆さんに声をかけたことはあまりないと思います。しかし、皆さんの中で立派な修道士になれる方は多数おられると思います。

今、皆さんの中からラ・サール会の修道士が生まれる時期になっています。確かに通常の結婚生活と修道会生活では人生の道筋が違います。私は修道会の生活しか経験しておりません。しかし私にとつての修道士としての人生は興味の尽きない「命の道」となっております。それは何故でしょうか。端的に言えば、皆さんとの出会いがとても大きな喜びであったと確信できるからです。もう一度二十五歳に戻ったとしても、間違いなくラ・サール会に入会し、可能であれば進んで日本人の為に自分の「イノチ」をささげます。

既にメキシコ人の若者として過ごした生活より、皆さんの同胞の為に過ごした時間が長くなっています。そして皆さんと心を一つにして、ラ・サールの名の下に信心、兄弟愛、貢献という三つの規範を毎日の生活の中で生徒達が身につけて成長して行く姿を見ることは嬉しいこと

ですし、修道士としての私の兄弟、家族は日本のラ・サールファミリーだと確信しています。

五十周年を経て、これからの我が校の将来は、同時に日本ラ・サール会の課題として考えると、日本人修道士の責任だと思えます。私と同じように皆さんも修道士として歩むことが出来るはずですが、修道士の中には、その徳を讃えられ聖人に叙せられた方もおられます。私はそんな優れた人物ではありませんが、皆さんの中から兄弟愛に溢れたブラザーが生まれ一般の先生方と一緒に立派に日本でのラ・サールを作っていただけであることを期待しています。

修道士となった方は、自分の国だけでなく、貧しい国々の恵まれない子ども達のために奉仕活動が出来ると思えます。本校の五十周年が、素晴らしい豊穰の時であった証に、皆さんの中から兄弟「Fer」が生まれることを祈ります。

わが校の百周年の為に卒業生の中から新しいラ・サール会の「顔」が誕生することを切に願います。

最後になりますが、わが校五十周年の為に協力いただいた皆様に深甚の感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。



函館ラ・サール学園 五十周年記念事業報告

函館ラ・サール学園同窓会事務局長

清水昌明

記念式典は、十月二十三日午前十時から函館市民会館において実施されました。

会場の席は、来賓の方々、在校生、保護者、学園関係者、同窓生など約一四〇〇名の参加者で埋め尽くされました。式は三部構成よりなり、まず第一部の「み言葉の祭儀」はカソリック式の厳肅な雰囲気のもとに挙行されました。第二部は「ラ・サール会挨拶・講話 来賓祝辞」でしたが、特にアルヴァロ・ロドリゲス ラ・サール会総長の格調高い講話は、参加者に深い感銘を与えてくれました。第三部のフォーラムでは「ラ・サールの社会貢献精神と私」という演題で、末永進札幌高裁判事（二期）、西尾正範函館市長（五期）、吉田晃敏旭川医科大学長（九期）がパネリストになり、加藤成史NHKアナウンサー（二十三期）の軽妙な司会進行のもと、短時間ではありましたが、非常に内容の濃いトークショーとなりました。



特に在校生には、社会で活躍する大先輩の話を生で聞くことができ、大変有意義な機会となったと思われます。

午後からは会場を函館国際ホテルに移し、同窓会主催のトークセッション「千人千職フェアを開催いたしました。トークセッションは「電子書籍時代に於ける文化創造」、「いのちを守り育てる街づくり」等、五つのテーマを設定し、それぞれの分野で活躍中の著名な卒業生による講演会という企画でした。

五会場での同時開催でしたが、同窓生、学校関係者、在校生、市民の皆さんが参集され、合計三〇〇席収容の会場は、ほぼ満席となりました。また、ホテルのロビーで開催した千人千職フェアも、様々な分野で活躍している同窓生からの出展で大いに賑わいました。

夕刻からの祝賀会には、同窓生を中心に関係者約七五〇名が集まる盛大な会となりました。市内のホテルで最大規模を誇る国際ホテルの大宴会場には五十六のテーブルが配置され、ほとんど立錫の余地がないという盛況ぶりは圧巻でした。

祝賀会のセレモニーは、ラ・サールの総長の祝辞の後、グリーンクラブの合唱も挟んで厳かな中で進みました。懇親会では、兄弟校の鹿兒島ラ・サールの野田健太郎同窓会長の音頭での乾杯を皮切りに、着席でのディナーを楽しむことができました。最後は、参加者全員による学生歌「It's a Long Way to La Salle High School」の合唱とともに祝賀会は終了しました。

なお、前日の市民会館でのJAZZコンサートでは、OBのプロジェクトメンが多数集合し、大ホールはほぼ満員となりましたが、その素晴らしい演奏で、前夜祭を大いに盛り上げてくれました。

また、記念式典当日の学校訪問、翌日のオープンスクールでは、新寮見学や授業・クラブ活動の見学に保護者、同窓生や、進学希望者とその親御さん達が多数来校され盛況でした。

このように十月二十二日から二十四までの三日間にわたり実施された母校の五十周年を祝う行事は、大盛会のうちに終了したことをご報告します。



五十周年記念事業 式典司会を担当して

函館ラ・サール高等学校 二十三期生

加藤成史

創立五十周年、おめでとうございます。懐かしくも興奮したあの日から一ヶ月以上経つというのに一昨日の事のように、まだ興奮冷めやらぬといった感じです。前夜祭のJAZZ研コンサート、当日の式典、トークセッション、祝賀会、そして日曜のオープンスクール等々：盛りだくさんのイベントでしたね。全てには参加できませんでしたが、顔を出したものの全ての細部まで克明に思い出すことが出来ます。多くの先輩や後輩、また父母の方々の力が結集され形となった会は、深く心に刻まれました。その場に居合わせ

ることが出来たこと、本当に幸せに思います。

私は、縁あって式典と祝賀会の司会という大役を預かりました。職業柄、様々な式典の司会やフォーラムのコーディネーターなどは仕事で経験していましたが、母校のそれは、やはり違います。当初「創立記念式典」は、関係者数十名が参集し、学校の始まりから今までの歩みが淡々と読み上げられ、参加者は自らの若かりし頃を投影しながらしみじみ五十年の歴史を振り返る：、厳かですがアットホームな会かと思っていました。が、ところがどっこい、市民会館大ホールを使用して大々的にやるというではありませんか。一三七〇人会場キャパ一杯の人に見守られて始まった式は、賛美歌が歌われるカトリック式の式典第一部に続いて、日本ではノーマルとされる、各界からの祝辞を交えたスタンダードな第二部、そしてOBを壇上に迎えて、「ラ・サールと社会貢献精神」というタイトルでのフォーラムの三部構成です。圧巻は（加藤的にですが）第三部。演者である三人のOBの方々には、それぞれの自己紹介以外はその場の「ノリ」に合わせておしゃべりしてもらおうというのです。日本的和を尊しとするフォーラムにおいては、時間制限があるなか、話の道筋はある程度立てておき、その上での雰囲気ですからみを持たせるといのが普通です。しかし「オールその場の空気感で進行」が主催者のたつての希望でした。これも先輩が私に課した義務と受け取り、かなり本気モードで取り組むことに。結局、話が右に行ったり左に行ったりしながらも何とか着地(?) 出来ましたが、これ

も、人生経験を積んだ先輩方の弁舌に依るところが大きかったからです。さすがです。お三方が互いに声を掛け合いながら学生時代を振り返る場面もあり、ウィットに富んだ会話で楽しく時間を過ごせました。私たちにこんな先輩方がいらっしやることは誇りです。多くの在校生やその父母の方々が聴きになっていました。みなさんも「こんなユニークな先輩がいるんだな」とお感じになったのではないかと思います。

先輩の大きな背中を見、懐かしい面々と酒を酌み交わし、心の休養になった三日間は、高校時代を過ごしたかけがえない三年間と同様のボリュームをもって記憶に残るでしょう。改めて、会を支えた全ての方々にお礼申し上げます。



五十周年記念事業に参加して

函館ラ・サール学園 元教諭

海川 敏雄

僕が、此の度の五十周年記念の行事に直接的に関わった部分は記念誌の編集という作業だけであったが、間接的には、二十三日のジャズコンサートを皮切りに、二十三

日の式典・フォーラム・トークセッション・祝賀会、更には、祝賀会を中座しての一期生・三期生の同期会への参加、二十四日の公開授業参観・・・へと続き、僅か三日間という短い期間ではあったが、実に愉快な、充実した「至福」の時を過ごすことになった。今振り返って見て、人生の晩年に至って、このような感動を伴った体験を得ることができたことを、心から嬉しく思っている。

僕の教師生活は四十三年間である。その間、時間講師として他の学校の教壇に立つたことはあるが、ラ・サール一筋に歩いてきた...と思っている。昭和三十六年の開校二年目から平成十四年三月までの、思えば波乱に富んだ四十三年間であった...。学園紛争は、まさにその最たるものであろうし、木古内の海岸や大沼での生徒の水死事故、紛争前後に起きた教え子の自殺事件...等、悲しく辛い思い出は、三十〜四十年以上経った今も脳裏の片隅に焼きついている。それだけに、記念行事の中で味わった喜びの中には、複雑さを伴った様々な思いが凝縮されていてはなかったか...と思う。

ラ・サールの卒業生は、時を経て大きな成長を遂げていた。それぞれの会場で、社会の様々な分野で中堅となって活躍している多くの卒業生に出合った。このようなことは、何も今回に限ったものではなく、ここ十年ほどの間に、本校の同窓生の間に顕著に見られる現象?...ではあるが、それが一堂に会した姿はまさに壮観であった。彼らの在学中に僕が描いた将来の姿は、その殆どが医者や歯科医師であり、公務員や大企業の社員であり、法律家や学者等であった。それが大きく様変わりしていたのだ。確かに、当時描いていた彼らの将来像の

一部分は当たっているが、ジャズマン、作家、漫画家、画家、役者、芸能人、指揮者、ギタリスト、新聞記者、アナウンサー、企業家...と言った、殆ど脳裏に浮かばなかった職種に就いて、しかも、それぞれの道の第一線で活躍している著名人が数多くいるのを改めて認識させられたのだ。これは嬉しい誤算であった。そして、この認識によつて、先程抱いた複雑な思いも消え失せ、すつかり有頂天になっていた。函館ラ・サールは、何も、医者や学者や一流企業の社員を輩出するだけの学校ではあるまい！生徒の個性を尊重し、それぞれが持っている能力をそれぞれの分野で最大限に伸ばしてやるような、そんな環境を備えた学校...、それが本校のあるべき姿ではないのか?...、そして、これだけの人材を輩出している現状を考えると、勿論、彼らの能力や努力は称賛に値するが、本校には、その成長を促すような土壌が存在していたのではなかったか?...、だとしたら、我々の関わった

ラ・サールの教育は、決して捨てたものではなかったのでは?...等々、思いは果てしなく広がりに、一時、愉快的思いに浸ったのだった。

会場のあちこちで、多くの同窓生にお会いしたが、中には五十年近くも会っていないために、名前を告げられても直ぐには理解できず、帰宅して急いで同窓会名簿をめぐり、漸く納得できたケース等も多かった。すつかり頭部が白くなり薄くなっている者、威風堂々たる体躯と貫禄を有する者...等、高校時代の面影を辛うじて残してはいるが、嘗てのあの紅顔の美少年の面影とは程遠くなっている...

だが考えてみると、こうした思いは相対的なもので、僕が感じた以上に、相手だつ

て同じようなことを考えていたに相違ないのだ。半世紀が経つというのはいかようなことなのかな...と思つたのだ。

かくして、様々な感慨や思い出を残して「五十周年」は終了した。式典や祝賀会はいずれもラ・サール会設立の学校にふさわしい風格と品位を備え、愛と温もりの滲み出た素晴らしいものであり、同窓会主催の行事を含め、ちよつぱり豪華で、まさに函館ラ・サール最大のイベントと呼ぶにふさわしい内容であったと思う。

あの祝賀会場で肩を組み、皆で「It's a Long Way」を合唱した時の感動が、今も甦ってくる。

あの時、僕は、函館ラ・サールと関わって生きた我が半生を思い、熱い感動を伴つた「至福」の時を過ごしていたのだ。そして、our heart is here...と叫んでいた。優れた教え子達と、誠実で豊かな心を持つブラザーと、優秀な同僚に恵まれた喜びを、全身で感じていたのだ...

函館ラ・サール学園の更なる発展と、同窓生諸氏の御健勝を心から祈念して止まさない。

(ホームページへの寄稿を転載させていただきました)





函館ラ・サール学園 五十周年記念事業を終えて

函館ラ・サール学園
創立五十周年記念事業実行委員会

学校関係の集まりというのは「有り難い」ものだ。これがイベントを終えての第一印象。七二〇人を超える人数（来賓、新旧教職員、生徒父兄、同窓生）が会場を埋め尽くした祝賀会会場で、あちこちで久方ぶりの再会を喜び合う人の塊が出来上がり、自然に雰囲気盛り上がる。特別に嗜好を凝らした演出などはむしろ邪魔なくらいだ。総長の格調高いメッセージ、校歌斉唱を挟んで約二時間の祝賀会・パーティは和気あいあい、熱気にあふれる雰囲気で大団円を迎えた。

（実行委員長 寺井慎一郎 二十五期）

仕事をしながらその間隙を縫っての実務作業の中で、初めての体験、予想を超えるトラブル発生など思いがけない展開に対応が遅れたことも多く、多くの皆様にご迷惑やご心配をお掛けしたことが多々あったことと承知しております。失礼の段はご容赦願えれば幸いです。

（実行委員 寺井慎一郎 二十五期）

母校を愛する同窓生の一人として今回の実行委員会としての業務には誠意を持って取り組ませていただきました。大変貴重な経験をありがとうございました。

事前申し込み・参加費の事前払い込みがかなりよく浸透していたこと、さらに多数の同窓生の皆様（札幌支部・東京支部からの応援も）にボランティアで受付のお手伝いをして頂いたことが大きな力になりました。全体としては、祝賀会は、参加されて喜んでいられる方が多かったようですので、それだけで同窓会の仕事としては大成功であったと思います。

記念事業の準備に携わった者の人数は決して多くなかった事を考えますと、これだけの仕事が出来たことは委員長を始めとした実行委員、理事の皆様のご尽力の結果と思います。

（実行委員 仲屋裕樹 二十二期）

大学を卒業して十年経ちますが、最近仕事以外で人と付き合うことなどめっきり減ってしまいました。今回のこのイベントを通じて、仕事上とは無関係に「五十周年事業の成功」という一つの目標に向かってさまざまな問題をクリアし成し遂げたという共通の体験をしました。これは形のない財産のような気がします。そういう意味では、実行委員に選ばれて裏方の仕事をさせていただいたことに感謝しております。

（実行委員 國谷大輔 二十八期）

なにより、ラ・サール同窓生のたくさんの方々と一緒に時間を共有できたこと、実行委員への激励もたくさんいただいたことです。本当に感謝しています。

終わってからは寂しさを感じるほどです。それほど五十周年事業の準備に

取り組んだ日々が、熱く甦ってきます。皆様のご尽力・ご協力に心から感謝申し上げます。

（実行委員 岩塚晃一 二十期）

（同窓会ホームページより一部を転載させていただきます）

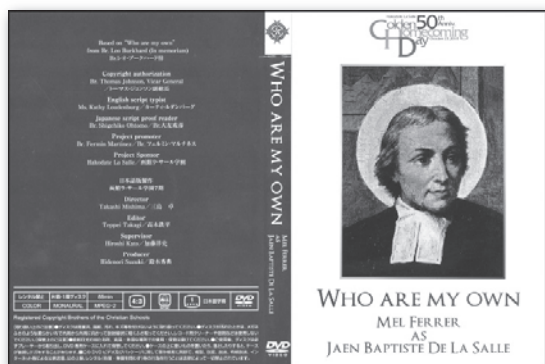
『Who are my own』DVD 日本語字幕版製作顛末記

函館ラ・サール高等学校 七期

三島 卓

フェルミン校長先生から「ラ・サール師の伝記映画があるので、五十周年の記念品として、日本語字幕版を作れないだろうか？」という打診が、七期鈴木秀典君にあったのは、二〇〇八年の暮れ。映画は、一九六四年に製作されたメル・フアラール（ラ・サール師役）主演のTV用劇映画。酒席の打ち合わせの勢いで、「やるか！」と叫んだのが命取りでした…。

シナリオの原稿がなく、Br・レオ・ブークハード悼が、映画を見ながら書き起こしたシナリオが翻訳のベース。予算削減のため学生に下訳を依頼し、下訳をプロに監修してもらおう段取り。完成した翻訳は、字幕として、さらに削ぎ落とす必要があり、私の担当でしたが、相応しい日本語の発見にずいぶん苦労しました。字幕稿が完成したのは二〇〇九年六月。七期加藤洋史君の尽力で、七月仙台に大友成彦先生を訪問。翻訳上、いくつかのご指摘を頂き、最終字幕稿としました。



ここで、七期高木鉄平君の登場です。字幕稿に、さらに手を入れつつ、映像に字幕データを貼り付ける、根気のいる仕事を引き受けてくれました。二〇一〇年二月、字幕が乗った仮完成版がアップ。試写は感動したなあ…。

数度の微調整を経て、五月末ついに最終版が完成。六月には鈴木秀典君の奮闘でパッケージデザインも完成。七月ついに全作業が終了しました。

十月二十三日の「函館ラ・サール学園五十周年」に配布されたDVDは、二年弱の時間を共有した製作担当の四人と、たくさん同期生の応援によって完成を見たものです。ラ・サール師の人となりを知る機会は、ありそうでなかなかありません。私見ですが、ラ・サール師は、「人々の海の中に降りて行った人」という印象が強く残りました。ラ・サール学園で学ばれた多くの同窓生の方々にご覧いただけることを期待しています。

記念コンサートを終えて

函館ラ・サール高等学校 7期
50th JAZZ 実行委員長 中島俊雄

皆様のおかげをもちまして、創立五十周年記念のジャズ・コンサートを盛況裡に終えることができました。心よりお礼申し上げます。

函館ラ・サール学園の卒業生は多彩な才能に恵まれ、多方面で活躍しておりますが、音楽の分野でもジャズ・ミュージシャンを多数輩出しております。

数年前より元同窓会長の佐藤憲一先輩(三期)を中心に今回の五十周年を記念して卒業生のジャズ・ミュージシャンが一堂に会したコンサートを開こうとの機運が盛り上がり、学園・同窓会の協力をいただきながら、記念式典前夜祭として開催する運びとなりました。



プレーヤーとして六期から三十三年までの八名が参加、ジャズ評論家の村井康司さん(十四期)が司会を担当するという豪華なステージとなり、八〇〇名を超える来場者の前で「校歌」や「It's a Long Way」をはじめスタンダードやオリジナル等を披露し大きな感動を与えてくれました。

また、コンサートに先立ち、今回参加出来なかった二名と鹿児島ラ・サール卒業の名ドラマー原大氏を加えたメンバーで「Our Jazz Heart Is Here」のタイトルの記念CDも作製されました。

これも、ジャズ研を創立時から指導してこられた沖田誠先生の尽力の賜と改めてその業績を讃えます。このような世代を超えたメンバーが共演する貴重な機会が若手のプレーヤーの成長の糧となっていくと思われまふ。まさにラ・サール高校のファミリー・スピリットが具現した催しとなったことを主催者の一人として心より喜んでおります。



コンサートに参加されたミュージシャンの皆さん、またご来場いただいた多数の卒・在校生・ご家族・ならびに教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

Our Jazz Heart Is Here La Salle 'Jazzy' Old Boys 販売価格 1,500円(送料込)

1 It's A Long Way 1:48
2 Bird Child (K.Matsuda) 5:17
3 Blue Princess (M.Tsushima & A.Kita Nagasawa) 6:30
4 Night (M.Matsuda) 4:52
5 Club Zensho (N.Yoshida) 4:40
6 At Dawn (T.Takahashi) 4:32
7 Missing Moments 2 (Y.Kobayashi) 5:50
8 Evening Tide (A.Kiuchi) 5:32
9 Tsunami (N.Yoshida) 6:43
10 アラビヤ夜 (M.Terashita) 5:05
11 Tak With Stars (K.Matsuda) 5:57
12 イ・イ・イ・イ (Y.Kasamura) 5:32
13 Stone 4:22

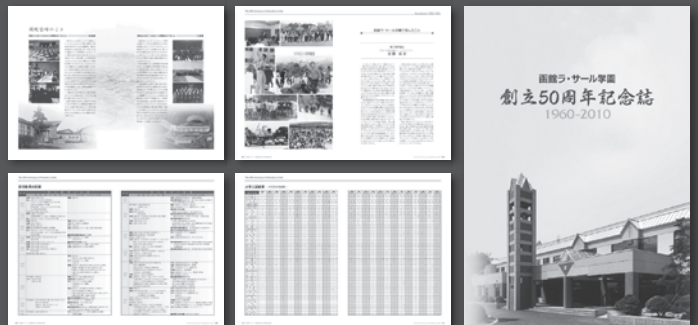
ご購入・お問い合わせは学園事務(TEL.0138-52-0365)までご連絡下さい。

創立五十周年記念誌が 完成しました

五十周年記念事業として編纂された記念誌がこのほど完成いたしました。

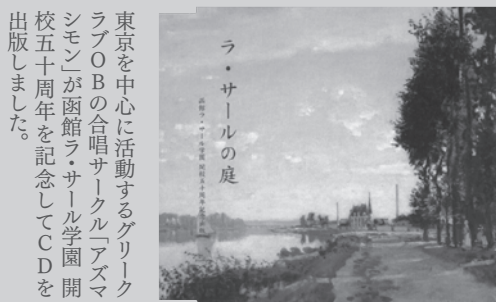
沿革や高校新寮をはじめ、豊富な写真で五十年の歴史を二四〇ページ・フルカラーで紹介しております。また、教職員の在籍記録や大学入試結果・部活動の記録などアーカイブも充実。懐かしい恩師の方々や一期から四十八期まで、各期の卒業生からの寄稿も掲載されています。

創立50周年記念誌 販売価格 1冊 5,000円(送料込)



ご購入・お問い合わせは学園事務(TEL.0138-52-0365)までご連絡下さい。

50周年記念CD 販売価格 1,000円



■お問い合わせ／東京同窓会 hlstokyo@yahoo.co.jp



東京支部



東京支部 支部長
植木清三郎（四期）

母校創立五十周年おめでとうござい
ます。今年の東京支部の活動は、本部
や各支部と同様、母校の五十周年と密
接に関連し、「ラ・サール」や「同窓会」
について改めて考える非常に内容の濃
いものとなりました。

二〇〇九年十月二十四日、有志がラ
ベル理事長をお招きして「ラ・サール
スピリット」についてディスカッショ
ンしたのを契機に、東京支部にラ・サ
ール研究会が発足しました。今年に入
り、四月二十八日、十月六日の二回に
亘ってラベル先生をお招きし、「ラ・
サールスピリット」や「卒業生の役
割」について意見交換を続けています。

三月には、ラ・サール同窓の第一回
アジア大会がマレーシアで開催されま
したが、本部の意向を受け、日本代表

として鹿児島本部、鹿児島東京同窓会、
函館本部の代表とともに佐藤秀樹事務
局長（十四期）が参加し、アジア地
域のラ・サール同窓生と交流を深めま
した。

六月十九日（土）開催の支部（東京
同窓会）総会には「函館ラ・サールつ
て何？」をテーマに、会員二二一名、
恩師の工藤先生と山本先生をはじめと
する来賓の方々合わせて二六〇名が集
いました。十期生の東野俊一氏（元企
業研究者）をモデレータとしたパネル
ディスカッションでは、二十期石川欣
也さん（医学教官）、三十期水島治さ
ん（法学教官）、四十期辻博之さん
（音楽家）が、それぞれの年代のラ・
サールでの経験や、それぞれのキャリ
アから見たラ・サール観を披露されま
した。十期生でカリフォルニア大学サ
ンディエゴ校教授の當作靖彦さんは、
記念講演で、「認知科学の面から見た
外国語教育の効用」と題し、外国語を
使うことが学習能力、問題解決力や対
人力を高めるといふ最近の研究成果や、
日本における外国語教育のあり方につ
いて述べられました。音楽部会の合唱
団アズマシモンは、十四期生の山崎秀
昭さんを中心に五十周年を記念して同
窓会のために作られた新曲「ラ・サー
ルの庭」などを披露しました。これは
十月二十三日に函館で開催された五十
周年記念行事でも披露され、CDも販
売されたので皆様のご記憶にも
新しいかと思えます。

東京支部では、月例の役員会開催に
合わせて二〇〇四年十一月からミニ講

演会を開催してきました。各界で活躍
する同窓生がそれぞれの専門分野での
知見を交換することで、同窓会の目的
でもある「会員相互の研鑽」を進めて
います。二〇一〇年一月に講演者が三
十名に達したので、母校創立五十周年
を記念する取り組みとして、ミニ講演
会要旨集第一集を発行しました。

十月三十日（土）開催のPTA関東
支部との連携企画では、植木会長が
「若人にとってフロンティアとは」と
題して講演したほか、今年で四年目と
なるパネルディスカッションで保護者
の方々やOBが意見を交換しました。
PTAの皆様からもこうした連携の継
続を期待されています。

このように、東京支部は、母校創立
五十周年を、同窓会東京支部にとつて
も新たな出発点と捉え、同窓生が親睦
を深めると同時に、本部、各支部、母
校、PTAはじめ関係者の皆様と相互
に連携し、母校や社会への貢献を実践
してまいりたいと考えています。



東北支部



東北支部 事務局長
伊藤恒敏（六期）

函館ラ・サール学園が創立五十周年を迎え
る二〇一〇年は、東北同窓会としては全体
の五十周年記念式典や記念事業が十月二十
三日に挙行されることから、例年十月を東
北同窓会総会の開催としておりました関係
上、東北同窓会としては、今年は函館の五
十周年記念式典や記念事業に多くの東北支
部会員の参加を促すためにも、独自の総会
開催を見送ることにしました。

ただ、役員改選時期でもありませんこと
から、文書通知による総会開催とし、意見
を求め、会則の変更や、新しい役員の承認
もお願いするという形をとりました。結果
的には二〇〇九―二〇一〇年度の事業報告
決算報告、二〇一〇―二〇一一年度の事業
計画、予算書を承認いただき、さらに会則
改正と新役員の承認も得られました。

その役員改選で、東北支部長が交代し、
遠藤八郎前会長（三期）から岡村州博新会
長（四期）となりました。

東北支部の課題は交通網がそれほど密に
敷設されていない広大な地域を準備範囲
としており、東北地域全体に散らばる約
五〇〇人の会員にいかに支部役員がコン
タクトを取れるか、取るのか、というこ
とです。まだまだ十分ではありませんが、
それでも岩手と青森には拠点が一応、で
きました。今後は福島、山形、秋田にい
かにして拠点を作るか、ということが重



要な事業目標となります。

今回の総会通知と共に、東北支部の事業の特徴でもあります「仙台ラ・サールホーム」への寄附事業も東北支部会員にお願いし、二〇一〇年十一月十六日現在で三十四万円強となっています。例年ですと、寄附総額が約五十万円に達します。従来からこれを、クリスマス時期に「仙台ラ・サールホーム」へお届けする、という形を取っています。ラ・サールホームへは同窓会本部が時に応じて寄附しておりますが、東北支部のラ・サールホームへの寄附は独自に二〇〇二年から行っているもので、東北支部の大切な事業としてこの寄附事業は東北支部会員の温かい協力の下、是非とも続けていきたいものと考えています。

今後、本部同窓会の運営のあり方も変化していくことになるかと思いますが、東北支部としても適切に時代状況に対応するために東北支部運営を徐々に改革していきたくと考えております。

札幌支部

札幌支部 事務局長

津島 伸次 (十五期)

平成二十二年度の札幌支部同窓会は、企画、運営を炭労された七期の皆様方のご尽力により、母校の五十周年記念行事に合わせ前日の十月二十二日(金)に京王プラザホテルにて開催されました。

今回は翌日に五十周年行事が控えていたこともあり、函館(母校、本部)からのご来賓をお招きせずに、記念講演の開催も見

送り、総会と懇談会のみで開催となりました。懇談会におきましては、昨年に引き続きPTA札幌支部の役員の皆様方のご出席を賜り、五十周年記念の前日にも拘わらず、総勢八十五名の同窓生にお集まり頂き、賑やかに楽しいひと時を共有することが出来ました。

大盛会のうちに本年度の札幌支部同窓会を無事終了することが出来まして、ご参加頂きました同窓生の皆様、ご来賓の皆様、及び当日まで入念に準備して頂きました幹事期の皆様方に心より深く感謝申し上げます。

当初、札幌支部(道央圏)という括りに囚われず、全道各地から札幌に集まって頂き、翌日の記念行事当日に札幌からバスで函館に乗り込むという計画を企画し、幹事期を中心に各期の幹事を通じてバスツアーの案内を広く呼び掛けて頂きましたが、残念ながら参加者はバス一台で十分足りるという余裕の状態でした。

道中、バスツアー参加同窓生相互の親睦を図りながら、在学中の思い出話を楽しく交えながら参加者一人一人の自己紹介、近況報告で盛り上がりました。

支部総会の企画としてはバスツアーも込みで新しく面白い企画でしたが、PR不足も否定出来ず、反省を踏まえ今後の企画にも活かしていくものです。

支部総会におきましては、例年の会計報告(決算、予算)に加えまして、事業計画等についてご承認を頂きました。

特にご報告すべき点は事業計画案にある『今後の学園同窓会の在り方について検討議論』していくというテーマをご承認頂いたことでもあります。

五十周年記念行事を終えて、今回を契機に今一度『学園同窓会の在り方』について、継続的に他の支部と緊密に連携して意見交換を行いながら幅広く議論していくことを重点に活動して参ります。

支部内に検討委員会を設置して、規約(会則)改正や支部の見直し等の課題も含め今後検討していくものであります。

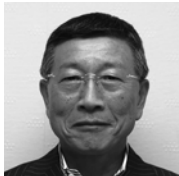
更に例年通り、各支部、PTA会との交流を密にする為に、各支部総会やPTA会札幌支部の会合に役員派遣を引き続き行うことも正規事業として決定致しました。

また一方では、札幌支部同窓生の親睦、交流を深める為に、例年通り「親睦ゴルフ大会」の開催も予定しており、札幌支部として今後も益々、活動内容の充実を図って参ります。

最後となりましたが、平成二十三年の札幌支部同窓会の企画、運営を担当して頂く幹事期は八期の皆様方となりますが、当事務局と共に連携しながら準備を進めて頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

今後も札幌支部の皆様方のご理解、ご協力を賜りながら、更には本部、他の支部の皆様方のご理解、ご協力を賜りながら、母校と同窓会活動を盛り上げて参る所存であります。

西日本支部



西日本支部長

藪越 英昭 (四期)

PTAからは、志賀支部長が出席してく

れました。参加者は、総勢三十名ほどとなりました。ご出席をいただいた皆様方に対し心より御礼申し上げます。

西日本支部の同窓会は、今年もラベル理事長による厳粛な追悼式が始まりました。いつもの事ですが、志半ばにして昇天された人たちの事を思うと深い悲しみがこみ上げてきます。反面、今年もこうして元気に出席できる事に感謝です。

その後、記念写真、懇親会と進み、お陰さまで短いひと時でしたが、楽しい時間を共有することができ、喜びにたえません。西日本支部の同窓会の特徴は、全員での集合写真と、個人の近況報告です。この事により更なる一体感も醸成されます。そして、最後に、「It's a long way」を合唱し散会しました。

今年、函館ラ・サール学園は、記念すべき五十周年を迎えました。五十周年に相応しいイベントが、計画されています。その中の、「トークセッション」、「同窓会運営のあり方」には、私が支部長として参加しました。支部名を、西日本と付けた経緯、一九九九年、平成十一年に第一回を開催したこと、一期一会の会として、名簿整理に時間をとり、一年に一度の同窓会を楽しく、心に残る同窓会になるように幹事一同気を配りました。又早い段階で鹿児島ラ・サールや、PTAのご父兄とのパイプ作りにも努力しました。

十月二十三日に記念祝賀会が行われ、学校、同窓生、在校生、ご父兄の皆様方と楽しい一日を過ごすことができました。

五十周年記念事業 募金活動中間報告

函館ラ・サール高等学校 一期
募金活動実行委員長 菅野剛造

昨年十月二十三日の母校創立五十周年記念祝賀会は多数の同窓生諸賢ご出席により盛大に開催され大成功裡に終わりました。既に、その思い出深い祝賀会から三ヶ月が経ちましたが、今も思い起こしては感激に浸る関係者も多いことと思います。

さて、この五十周年に際しまして、母校は記念事業の一環として高校寮を新築し、昨年、完成を見て、生徒も新しい寮での生活を始めております。この新築に至る経緯は省きますが、総工費だけで総額十二億円もの巨費を要する大工事のため、大規模な銀行借入れを余儀なくされた母校は、少しでも財政負担を軽減するために、同窓会に対して正式に三千万円の寄付を求めました。それを受けて、同窓会は平成十八年の総

会でこの要請を承認、直ちに募金活動実行委員会を設置しましたが、図らずも私が委員長就任を要請されました。当初は、私のようなロートルの出る幕ではないと考え辞退しましたが、今あるのも母校に世話になったお陰であると思得され、それならば老骨にムチ打つてでも、その恩返しをしなればならないとの思いに至り、要請を引き受けた次第であります。

早速、本部及び各支部を通じて同窓生各位に対し、今二十三年三月末を期限として寄付のお願いをいたしました。その結果、今年一月二十日現在で募金額は一億二二九五万五千円余に達しました。これは、目標

額を大きく上回る額であり、母校の要請に応えるに十分な額ではありません。

しかし、事実を申せば、この額は、たった一人の同窓生が何と一億円もの巨費を寄付して下さったことによるものであり、この分を除くと、募金額は僅か二千三百万円弱であって、目標額の七十六%に過ぎないのです。

しかも、更に残念なことは、募金者が八九八名に止どまっていることです。物故者を除く母校の卒業生は現在一万三千人弱、そのうち消息判明者は約七千七百人ですから、募金者はその僅か十一%に過ぎません。

前述のように、自分が今、こうして各界で活躍し、仕事が出るのも、元をただせば、母校に学んだお陰である、みんな、それを弁えているはずなのに、その母校の切なる願ひに応えた同窓生がたったの十一%、しかも、寄付金の殆どをたった一人の同窓生に委ねてしまっている現実を見ると、むしろ、その責任の大半は私の力不足にあるとは思いますが、それにしても、情けないの一語に尽きるのではないのでしょうか。

母校としては、同総会が目標額を大幅に上回る一億円以上を集めてくれたことに満足しているかも知れませんが、私としては、募金活動委員長の立場を離れて、一同窓生として振り返ってみても、大いに不満を覚えます。

募金の期限は今年三月末です。二千三百万円を三千万円にするため、一人でも多くの同窓生に寄付金を振り込んでいただきますようお願いいたします。もちろん、既に寄付した人には今一度の寄付をお願いする次第です。私としましても、最後のご奉公のもりで頑張る所存ですので、同窓生の皆様、よろしく、お願い申し上げます。

函館ラ・サール学園50周年記念事業 寄付金募集

一、寄付募集期間

二〇〇六年九月一日～二〇二二年三月三十一日

二、寄付の方法

寄付の申込書、送金依頼書(郵便送金の場合)を今回の同窓会会報送付にあたって同封させていただきます。個人名、又は団体名(同期会等)その場合も責任者名を記載してください)にて別記口座あてにお振込みをお願いします。なお、寄付した方の確認のために同封の「寄付金申込書」は振込みの方法の如何にかかわらず、所要事項を記載の上別途事務局までご送付(FAX)ください。

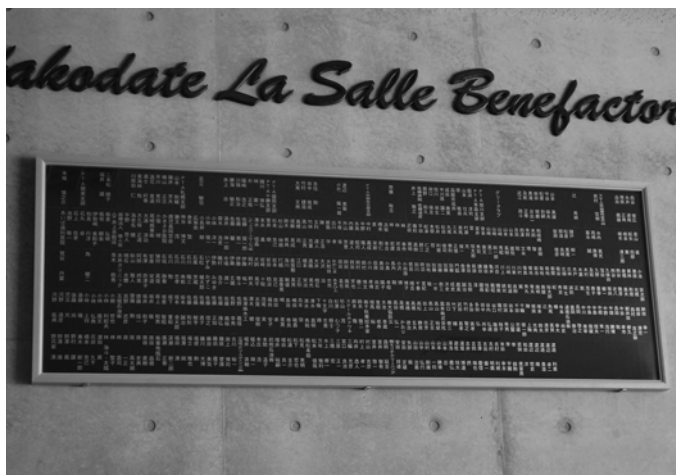
三、寄付金額等

一口 五、〇〇〇円 出来れば一口以上をお願いします。

(なお、同期の懇親会等での残余金等の場合には端数金額も含めこの限りではありません)

四、寄付者氏名の公表

同総会ホームページに寄付者名を随時公表いたします。(匿名、イニシャルなどを希望の方はその旨通信欄にご記入ください) 五万円以上のご寄付を賜りました方には、校内の寄付者銘板にご芳名を記載し、末永く顕彰いたします。(左記写真)



平成21年度 事業報告

平成21年	8月 22日	同窓会総会
	9月 5日	第1回同窓会理事会
	9月 12日	西日本支部総会 出席/齊藤、島本
	9月 26日	札幌支部総会 出席/齊藤、島本、品田
	10月 3日	東北支部総会 出席/齊藤
	10月 23日	第2回同窓会理事会
	11月 1日	学園追悼式 出席/清水
	11月 21日	第3回同窓会理事会
	12月 1日	会報第10号発行
	12月 15日	学園クリスマス会 出席/清水
	12月 26日	第4回同窓会理事会
平成22年	1月 10日	三役会
	1月 29日	第5回同窓会理事会
	1月 30日	同窓会入会式 出席/齊藤、佐藤、品田、清水
	2月 1日	高校卒業式 出席/佐藤
	2月 13日	第2回募金実行委員会
	2月 13日	記念事業実行委員会 出席/支部代表
	3月 12日	第6回同窓会理事会
	3月 19日・20日	同窓会アジア大会(マレーシア) 出席/清水、海外交流委より佐藤(14期)
	4月 2日	入学式 出席/齊藤
	4月 10日	第7回同窓会理事会 出席/支部長参加
	5月 20日	第8回同窓会理事会
	6月 18日	同窓会奨学金選考会 出席/齊藤、清水、十文字
	6月 19日	東京支部総会 出席/齊藤、菅野、島本、川口

平成21年度 会計報告

一般会計		(円)
収入の部		
A. 同窓会会費(48回生)(34,600円x211名)		7,300,600
B. 同窓会グッズなどの売上げ		1,290,800
C. 受け取り利息		122,305
D. 名簿売上げ		155,000
E. 雑収入		50,000
合 計(A)		8,918,705
支出の部		
A. 広告宣伝費		122,535
B. 荷造運賃		20,102
C. 寄付金		1,000,000
D. 会議費		160,900
E. 消耗品費		41,614
F. 旅費交通費		1,287,457
G. 手数料		159,280
H. 通信費		105,021
I. 支部運営費		1,900,000
J. 総会費		248,174
K. 会報関係費		1,388,651
L. 雑費		693,308
合 計(B)		7,127,042
在 庫A. グッズ等の在庫(C)		855,575
次年度繰越金 (A) - (B) - (C) = 936,088		

奨学会会計	
ラ・サール奨学基金	27,500,000
創立30周年記念事業費[728名]	9,542,021

奨学金平成21年度給付分(平成21年7月支給)	
収入の部	
1. 前年度繰越金	136,803
2. 基金の平成20年度利息	6,487
3. 奨学OBの保護者からの寄付	50,000
4. 奨学基金からの取り崩し	2,000,000
合 計(A)	2,193,290
支出の部	
1. 平成22年度給付金(24万円x9名)	2,160,000
合 計(B)	2,160,000
次年度繰越金 (A) - (B) = 33,290	

ラ・サール奨学基金	
内訳	
商工中金 ワリショー	20,000,000
函館商工信用組合 定期預金	5,500,000

特別会計	
I. 平成16年度一般会計余剰金からの定期預金	12,000,000
II. これまでの利息	126,365
III. 50周年事業(平成21年4月以降)	119,535,390

監査報告
一般会計・奨学会会計ならびに特別会計ともに、監査の結果、諸帳簿も整い適正に執行されていることを認めます。

平成22年8月19日(木) 監査 佐古一文・和根崎直樹



2010.8.21

函館ロイヤルホテル

黙祷の後、齊藤会長、フェルミン校長の挨拶。この後、議事に入り事業報告、会計報告、監査報告がなされ、拍手で承認。

また、五十周年記念事業と募金活動についてそれぞれの委員長から話をいただき、次に会則十六条の改正について提案がなされ、拍手で承認。総会終了。その後ラベル理事長の講話があり、七時十五分から井上副校長(六期生)の乾杯の音頭で懇親会が

スタート。
今年の出席者は約八十名と例年に比べ少なくなりました。これは十月の記念行事が近いこともあり、今回は参加を見合わせた方が多かったせいではないかと思われます。期によっては十月に集まろうということでも今回は声掛けを積極的にしていないということもあつたようです。来年の総会には再び多くの方々に出席していただけるよう期待しています。

宴もたけなわの中、出席者によるスピーチに移りました。トップバッターは、旧職員の方々にお願いしました。遊佐先生、村元先生、中越先生、二本松さん、倉橋先生、深水先生、宮崎先生の七名の方々です。次に現職員ですが、当日出席していただきましたのはラベル理事長、フェルミン校長、井上副校長、沖田教頭、土田先生、清水寮



頭、品田先生、高田事務主任、十文字先生、小川先生、北谷先生、カンフィル先生の十二名でした。また、今回の総会に十二名と一番参加人数の多かった六期の方々にも登壇していただきスピーチをいただきました。今回一番の若手は四十七期で四名の出席でした。



お知らせ

今年(平成22年)の総会は8月20日(土)ホテル函館ロイヤルにて開催と決定しました。
多数の方々のご参加を期待しています。

大学別合格者数と年度別推移

卒業年度	2010 H22	2009 H21	2008 H20	2007 H19
国公立大学				
北海道大学	6	12	18	27
北海道教育大学	1	1	2	3
室蘭工業大学	1	1	2	2
小樽商科大学	0	0	2	0
旭川医科大学	2	3	3	2
札幌医科大学	4	7	5	5
弘前大学	3	4	3	2
東北大学	2	2	4	6
山形大学	1	1	2	1
筑波大学	2	0	2	1
千葉大学	0	2	1	3
東京大学	2	3	5	4
東京工業大学	0	1	0	4
東京外国語大学	1	1	0	1
一橋大学	2	4	0	0
横浜国立大学	2	2	4	1
信州大学	1	1	1	2
名古屋大学	0	1	0	0
京都大学	2	0	4	2
大阪大学	0	1	1	2
防衛大学校	0	2	3	0
防衛医科大学校	0	1	1	2
その他の国公立大学	18	15	26	29
国公立大学・小計	50	65	89	99
私立大学				
北海学園大学	0	0	0	6
北海道医療大学	0	1	3	3
青山学院大学	3	5	9	3
学習院大学	0	2	5	1
慶應義塾大学	13	16	6	10
国際基督教大学	0	3	0	0
芝浦工業大学	0	2	2	1
上智大学	1	5	4	4
中央大学	8	13	20	14
東京薬科大学	1	0	3	1
東京理科大学	5	8	12	12
日本大学	10	10	16	8
法政大学	2	6	8	7
明治大学	8	12	14	15
明治学院大学	3	3	7	3
立教大学	5	11	10	8
早稲田大学	10	16	17	14
同志社大学	1	0	5	6
立命館大学	3	3	17	1
関西大学	1	0	3	1
関西学院大学	1	3	1	0
その他の私立大学	68	62	70	76
私立大学・小計	144	181	232	194
総計	190	246	321	293

(平成22年4月15日判明分)

クラブ活動成績 (主要なもの)

《高体連・高野連 その他の大会の記録》

- 剣道部**
高体連函館地区春季大会 団体戦 2位
高体連函館地区大会 団体戦 3位
- 硬式テニス部**
高体連函館支部大会
個人戦 シングルス 柴田幸之介 3位
ダブルス 柴田・秋葉 3位
高体連全道大会
団体戦 ベスト 8
- ソフトテニス部**
高体連春季大会
個人戦 ダブルス 泉・菅原 準優勝
- 硬式野球部**
第49回春季北海道高等学校野球大会
1回戦 ラ・サール 0-4 函館工業
南北海道大会函館支部予選
1回戦 ラ・サール 9-1 奥尻
2回戦 ラ・サール 1-0 市立函館
決勝戦 ラ・サール 0-9 函大有斗
- サッカー部**
春季大会
1回戦 ラ・サール 5-0 八雲
2回戦 ラ・サール 0-3 函館工業
高体連地区大会
1回戦 ラ・サール 4-0 南茅部
2回戦 ラ・サール 0-3 函大有斗
3回戦 ラ・サール 3-0 函館中部
4回戦代表決定戦
ラ・サール 1-3 函館工業
- 柔道部**
春季大会 団体戦 準優勝
高体連地区予選 団体戦 3位
個人戦 73kg級 大岡勇斗 優勝
81kg級 勝又顕 優勝
90kg級 谷川丈太 2位
100kg級 木浪龍太郎 3位
全道大会
個人戦 100kg級 木浪龍太郎 ベスト 8
- 水泳部**
第63回高体連函館支部選手権
200m自由形 佐藤寛之 2位
山本吉紀 3位
200m背泳ぎ 布施翔太郎 3位
200m個人メドレー 斎藤隆太郎 2位
400m個人メドレー 布施翔太郎 1位
400mリレー 中村・花田・長沖・太齋 2位
800mリレー 中村・布施・花田・太齋 1位
- 体操部**
高体連春季大会
個人総合 一部 川口諒祐 2位
高体連支部大会
個人総合 一部 川口諒祐 4位
金高彰海 5位
高体連全道大会
個人総合 一部 川口諒祐 11位
- 軟式野球部**
第21回秋季北海道高等学校軟式野球大会
函館支部予選大会 優勝
ラ・サール 3-0 函館工業
- バレーボール部**
春季大会 第3位
決勝リーグ
ラ・サール 0-2 函館工業
ラ・サール 0-2 函館有斗
ラ・サール 2-1 松前

- 高体連 第4位
決勝リーグ
ラ・サール 0-2 函館工業
ラ・サール 0-2 函館有斗
ラ・サール 0-2 市立函館
- ラグビー部**
高体連函館支部春季大会 3位
1回戦 ラ・サール 31-0 函館有斗
準決勝 ラ・サール 10-50 函館工業
3位決定戦 ラ・サール 21-14 函館高専
- 陸上部**
道南春季陸上大会
200m 大久保 1位
高体連函館支部大会
200m 大久保 1位
400m 大久保 1位
4×400mR 3位
走高跳 幸地 2位
高体連全道大会
200m 大久保 3位
道南陸上選手権大会
400m 大久保 1位
- ワンダーホーゲル部**
函館支部大会 優勝
- 《**高文連・その他の大会・活動の記録**》
- グリー部**
第77回NHK全国音楽コンクール
道南地区大会 金賞(地区代表)
- 放送部**
NHK杯全国放送コンテスト北海道大会 出場
- 棋道部**
第43回函館地区高校将棋大会 団体戦 優勝
- 《**中体連・その他の大会の記録**》
- 剣道部**
函館市中体連
団体戦 優勝(4連覇・通算7回目)
個人戦 鈴木(2年) 準優勝
渡島支庁中体連大会
団体戦 準優勝
- 柔道部**
函館市中体連 団体戦 3位
個人戦 55kg級 藤本健斗 準優勝
73kg級 稲垣雄大 準優勝
- 野球部**
函館中学校春季大会 優勝
1回戦 ラ・サール 6-3 戸倉
2回戦 ラ・サール 6-0 宇賀の浦
準々決勝 ラ・サール 10-4 湯川
準決勝 ラ・サール 6-0 赤川
決勝 ラ・サール 1-0 亀田
全日本少年軟式野球大会函館支部大会 優勝
1回戦 ラ・サール 3-0 野田生
2回戦 ラ・サール 2-0 凌雲
準々決勝 ラ・サール 3-0 上磯
準決勝 ラ・サール 3-0 深堀
決勝 ラ・サール 1-0 森
函館市中体連 準優勝
1回戦 ラ・サール 2-0 湯川
2回戦 ラ・サール 2-0 教育大付属
準々決勝 ラ・サール 1-0 五稜
決勝 ラ・サール 0-2 深堀
- テニス部**
道南ジュニアテニス大会
14歳以下 ダブルス 栗林・長谷川 3位

住所変更通知

毎年、同窓会会報が多数「転居先不明」で返送されてきます。この会報がお手元に届いた場合でも、「転居先」に転送された場合は、次年度以降には「転居先不明」になる場合がありますので、お手数ですが、下記の「住所変更通知」を事務局にFAXしていただくか、ホームページからご連絡いただくようお願いいたします。※本データは函館ラ・サール同窓会事務局が責任をもって保管し、同窓会名簿の制作及び同窓会・同期会の連絡以外の用途には一切使用しません。

切り取り線

FAX 0138-54-0365(函館ラ・サール学園事務局)

★は必須事項

ふりがな ★氏名	(姓) (名)	(旧姓) ※変わっている場合	電話	TEL() -
卒業年次	西暦 年3月 回生		勤務先(学校)	名称 TEL() -
★現住所	〒□□□-□□□□ (都・道・府・県) (市・区・町・村)		メールアドレス	@